



## おしき 折敷にのせた祈りの鈴と捧げもの

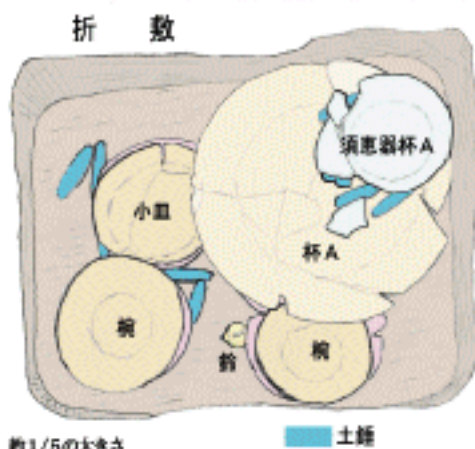
向日市藏冠井町七反田



折敷に納められていた鈴や土鍾・土器

長岡京  
(784～  
794年)

**「玉手箱」の発見** 向日市の南東部、市民温水プール南側の水田で発掘調査をしました。長岡京左京のメインストリート～二条条間大路・東二坊坊間東小路～を探ることが目的です。30センチ掘り下げると、今から1200年前の長岡京当時の地面に到達しました。道路側溝には黒っぽい石混じりの土が堆積し、たくさんの食器や瓦とともに、完形の土器8点が木製の折敷の上に重ね置かれた状態で出土しました。銅鈴1点、土鍾14点もありました。破片となった他の土器や瓦とは違い、特別な意味があるようです。食器は長岡京の時代のもので、延暦3(784)～13(794)年頃とわかります。埋まった土をよく観察すると、人の手で埋め戻される直前に置かれたようです。溝を埋めて道路として使えないようにするのは、長岡京が廃都になり平安京に移った延暦13(794)年頃と考えるのが自然です。



同じ形の土器が2枚ずつ重ねてあります。

**何に使ったの？** 考える鍵は、銅製の鈴と土鍾にあります。鈴は、天皇の魂をおさめる鎮魂祭に使われるなど霊力をもった特殊な道具とみられます。長岡京の調査でも8個しか発見されていないほどの貴重品です。土鍾はもともと魚を取る網のオモリですが、本例は軽いのでは儀式用と思われます。

このようにみえてくると、折敷にのせられた品々は、長岡京を廃都にしたとき行った鎮魂のマツリに使われた神饌(しんせん) (神への捧げもの) セットであった可能性があります。

(用語解説：折敷：四方に折りまわした縁をつけた、へぎ板製のお盆。)



調査地周辺の様子（南東から）

調査地は、左下の人が働いているところです。その奥の市民温水プールでは、大形の建物群を整然と配置した離宮跡、右手奥のビルでは平安京遷都前に仮の内裏（天皇の住まい）とした東院跡が発見されています。1200年前はこの水田地帯に邸宅や役所などがありました。



二条条間大路の南側溝（西から）

側溝は幅1.2m、深さ0.5m。溝内には使えなくなった食器、瓦がたくさん出土しました。その多くは道路が使われなくなった時に土と一緒にまとめて捨てられています。



二条条間大路北側溝（西から）

側溝は幅1.5m、深さ0.7m。南側溝に比べ深く掘りこまれています。南側溝ほど遺物は出土していません。二条条間大路の道路幅は、25.0mとわかりました。



調査地の様子（北から）

手前の調査区で二条条間大路北側溝や築地の下をくぐる暗渠排水溝の跡が、奥の調査地で二条条間大路南側溝や銅筋のはいった折敷が見つかりました。水田の下に都が埋もれていることがわかります。